

清峰会

—筆と仲間と、24年—

清峰会—筆と仲間と、24年。

書を通じて生まれた、世代を超えたつながり

今から24年前、鴛子地区の皆さんから「習字を教えてほしい」という声があったことをきっかけに、平成13年に久保木源さん(鴛子)が立ち上げた清峰会。

現在は17名の会員が所属し、職業や年齢もさまざま。村外から通う人や、夫婦で参加する会員もいます。月2回、皆さんが集まりやすい日曜日と月曜日に定例会を開催しています。

活動の拠点となっているのは、元々たばこの葉の集積倉庫を改築した「清峰庵」。久保木さん自ら机や椅子を用意するなど、会員が書に向き合える環境を整えてきました。



(清峰庵看板写真)

元は、たばこの葉を集積する倉庫だった場所を改築し、造られた「清峰庵」。

久保木さん自ら机や椅子を調達し、会員が書道をしやすい環境を整えた。



清峰会

(七夕大賞を受賞した久保木源さん)

「書くこと」が、日々を豊かにする

清峰会を始めて良かったと感じる瞬間について、久保木さんは「会員の『和』が励みになり、1人も欠けることなく仲良く楽しい時間を過ごせること」と話します。

会員の皆さんが清峰会に入会したきっかけは、知人や久保木さん、兄弟からの誘いなどさまざま。

そして、皆さんにとって「習字とは？」と尋ねると、「人生のパートナー」

「大人になった今だからこそ、唯一の楽しみであり、自分の意識を高めてくれる存在」

「書道をしている1時間は、何も考えずに筆に向き合える大切な時間」

そんな言葉が返ってきました。

筆をもち、静かに文字と向き合う時間。そこには、日々の忙しさから離れ、自分自身と向き合うひとときがあります。



筆を置いた後も、仲間との時間が続く

清峰会の魅力は、書道そのものだけではなく。

筆を置いた後には、仲間との会話が待っています。習字という一つの趣味を通して集まった仲間とのコミュニケーションも、清峰会が24年間続いてきた理由の一つです。

「書くこと」だけではなく、「人とつながること」。

地域の人との交流や、年代を超えた集まりが、毎日の暮らしを豊かにする「源」になっています。

これからも、筆と仲間と

「筆を持って字を書く人が少なくなっているからこそ、皆さんと一緒に字を書けることが嬉しい。これから先も続けていきたいです。」

24年間、書を通じてつながってきた仲間たち。

一枚の紙に向かい、一本の筆を動かす時間。そして、筆を置いた後に交わす何気ない会話。その一つひとつが積み重なり、清峰会という「人のつながり」を育んできました。

これからも清峰会は、書を通じて仲間とつながりながら、平田村の文化の一つとして歩み続けます。

